連載⑨⓪

内海善雄（ITU元事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

老人が率先垂範できたなら…社会に笑顔も増えるかも

郵便局の窓口やスーパーのレジの前で老人が声を張り上げて怒っている姿をよく目にする。そういう筆者も担当者の対応のまずさに、時々キレてしまうことがある。昨今、駅員への暴力や病院での暴力・暴言は、高齢者に多いとのことである。

しかし、老人のイメージは古今東西、円満な笑顔の翁（おきな）と媼（うば）である。科学的に見ても、そのことは実証されるようだ。例えば、最近の「Social Cognitive and Affective Neuroscience」誌には、「脳の構造と性格は密接に関係しており、年を取るにしたがって脳の構造も変わり、神経症的傾向が薄れ、感情をコントロールしやすくなり、誠実さと協調性が増し、責任感が高まり、より敵対的でなくなる」との英米伊の科学者チームの論文が掲載されている。

なぜ日本の老人はキレるのか

なぜ日本の老人たちは、人間の本来の姿からかけ離れて、キレるのか。よく言われる理由は、老人の孤独である。

長年、滅私奉公で働いてきた人が、いきなり用済みにされ、会社から放り出されて行き場がなくなる。子供たちと一緒に住み、ゆくゆくは面倒を見てもらいたいという期待は、今日のほとんどの高齢者には叶わない夢である。

セーフティネットとなるべき地域コミュニティは崩壊しているし、現役時代に働きづめだった人たちは、人的なコミュニティをつくる暇もなく過ごしてきた。ハッピー・リタイアメントの夢が壊れ、現実の中に放り出される老人たちは、結局、天涯孤独の生活の中で要求不満がつのり、些細なことにキレるようになるというのである。

筆者は、加えて、世の中に不満が鬱積し、皆、イライラしているが、より一層弱者の老人には、冷たい現実があるからだと思う。以下は、最近の、東京都区内に住む老人（筆者）のある日の出来事である。

老人のある一日

病院へ行くために外に出ると、自転車が猛烈な勢いで歩道を走り、危なくて右往左往する。その中を、スマホを見ながら歩く若者と、ショッピング・カートを杖代わりに歩く老婆とを避けながら駅へ急ぐのは相当神経を使う。

電車に乗るためホームで行列すると、ここでもスマホを見ている人が電車が来ても動かず、行列が崩壊して老人は跳ねのけられる。電車に乗ったら、妊婦を前にして優先席で足を投げ出して寝そべるように座ってスマホをいじる若者や、込み合った場所で肩から吊るして抱えているバッグが老人の腹を圧迫していても平気な女性、痴漢ではないかとやたらに振り返って睨みつける女性などに囲まれ、目的地まで難行が続く。

目的の病院で二時間余りを要して処方箋をもらい、隣接する薬局へ行くと、何年間も使用している簡単な薬なのに二時間以上も待たされた。挙句、くどくど薬の説明をしようとする。なぜ、最初に時間がかかることを一言言えないのか。また、説明の必要が皆無の常用薬なのに無駄な時間をとって説明しようと

するのは指導料を取るためか、それともボケ老人と見たからか。店の順番表示器の表示もでたらめ。病院の隣という有利な立地条件に胡坐をかいた薬局である。

昼食時間はとっくに過ぎてしまい、近所の食堂はどこも人けがない。常用の薬を入手するのに、いつの間にかほぼ一日の不快な時間が必要な東京となっているのだ。

そんな不愉快な気分の中で、銀行に行くと杓子定規の煩瑣な手続きを要求され、多少の現金を引き出そうとすると、根ほり葉ほりと「何のために引き出すのか」とプライバシーを侵す質問を浴びせられ、オレオレ詐欺に引っかかっているのでないかと疑われる。

やっとの思いで家にたどり着きテレビを見れば、総理のお友達には、破格の減額を行った国有地売却や、大学建設に査定もなくポンと数十億円の補助金が交付されているとの報道。その一方、何の疑問もなく設定された二%のインフレ目標の達成ができないことが悪のように報じられる。こちらの年金は減ることがあっても増えないのに……。一体、日本はどうなっているのかとテンションはさらに高まる。

高齢者は、何事も昔は良かったと懐かしみがちなので、この腹立たしい現代の日本社会に若者よりも一層腹立たしく感じるのではないのか。そんな中、活動能力の落ちた年寄りとしてぞんざいに扱われると一気に不満が爆発してしまうのだ。

笑顔の老人の効用は世界中どこも同じ

素晴らしかった引越屋の秘密

最近、終の棲家を求めて東京を脱出したところ、引越屋の若者たちが、実に爽やかであった。ネットで引越屋を数社見つけ、見積もりを取った中で、大手の半額に近い料金を提示した中小の引越屋であった。あまりに低価格なので本当にちゃんとやってくれるのか心配だったが、パッキングの中年女性や運搬の若い逞しい男性職員が、実にテキパキと働き、食器を一個も壊すこともなく大量の荷物を運送してくれた。

今まで二十数回、引っ越しの経験があるが、こんなに能率よく、かつ低料金で引っ越しをしてくれたのは初めてであった。疲労困憊の中でも、筆者も家内も、久方ぶりの好々爺と媼の笑顔が自然と出てきたのである。

営業担当の「うちの社長は背広でゴミを捨てる」という言を聞いて疑問が解けたような気がした。なんでも一代で会社を築いた社長は、背広を着たまま引っ越しで出たゴミを捨てるのをよく手伝っているとのこと。

老社長の率先垂範が、社員に浸透し、能率よく的確に作業をするチームが形成され、価格も安くできるのに違いない。

スマホやPCに釘付けになった現代は、皆が自己中心になり、他人への関心は薄れ、社会が荒んできているように思える。年寄りの経験や昔風の考え方が解決してくれる場面は結構多いのではないだろうか。老人たちがもっと社会活動に参画し、率先垂範できるような環境が整えば、少しは不満の解消にもなり、笑顔も増える社会になるのではないかと思った次第である。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。ＩＥＥＥ名誉会員。